

## ノカモシレナイについての一考察 ——JCK 作文コーパスの使用実態から——

松本匡史\*

「ノ+モダリティ表現」は、ノの有無によりニュアンスや機能の違いもあり、非常に複雑である。本稿では、『JCK 作文コーパス』における日本語母語話者の使用実態を観察し、「ノ+モダリティ表現」の1つである「ノカモシレナイ」の産出に関して、1つの方略として使い分けの目安の提言をおこなった。

「ノ+モダリティ表現」におけるノ有り表現は「話し手による事態に対する把握の弱め」と捉えることにより、産出時の1つの使い分けを提言した。(ア)ではカモシレナイ、(イ)(ウ)ではノカモシレナイを用いることにより自然な使い方となると考える。

(ア)「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切れる場面

(イ)「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切れない場面

(ウ)「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切らない場面

キーワード：ノカモシレナイ、カモシレナイ、JCK 作文コーパス

### 1. はじめに

ある非母語話者から、「ノダロウ」や「ノカモシレナイ」<sup>1</sup>などの形式について、前接する「ノ」の有無による意味の違いが分からないという話を聞いた。これらはノダのノと習ったが、ノダ自体非常に分かりづらく非母語話者にとっての産出困難点であるというのだ。確かに表1に示すように、日本語母語話者と非母語話者で同じテーマについて書かれた『JCK 作文コーパス』<sup>2</sup>においても、学習者(中国、韓国)のノカモシレナイの使用割合は母語話者と比べかなり少ないように見え、ノカモシレナイの非用がうかがわれる。先行研究で指摘さ

\* まつもと・まさふみ、埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程／浙江工商大学東亜研究院特邀研究員

<sup>1</sup> 「のかもしれない」「のかもしれない」等を「ノカモシレナイ」、ノ無しを「カモシレナイ」と表記する。なおスペースの都合上、ノカモシレナイを「ノカモ」、カモシレナイを「カモ」と略することがある。

<sup>2</sup> 『JCK 作文コーパス』は、科学研究費補助金「テキストの結束性を重視した母語別作文コーパスの作成と分析」(2013年度～2015年度、基盤研究(C)、研究課題番号:25370577、研究代表者:金井勇人)の研究結果として作成されたコーパスである。日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者による日本語作文が全180本収録されている。作文執筆者の属性は、日本在住の日本人大学生、日本語能力試験のN1合格者および合格相当の力を持っていることが確認された中国在住の中国人大学生と韓国在住の韓国人大学生である。

れているように、ノカモシレナイのノが、「ノダのノ」であることは否定されるものではないと考えている。しかしながら、「ノダのノ」と理解することが、産出困難を解消できるわけではないことは表 1 からもうかがわれる。

表 1. カモシレナイの使用数<sup>3</sup>(JCK)

	カモ	ノカモ	計
韓国	64 (87.7%)	9 (12.3%)	73 (100%)
中国	55 (96.5%)	2 (3.5%)	57 (100%)
日本	37 (71.2%)	15 (28.8%)	52 (100%)

加えて「ノ＋モダリティ表現」<sup>4</sup>の複雑さも産出が困難になる原因と考えられる。学習者及び日本語教師向けの文法解説書である『日本語文法ハンドブック』(庵ほか 2000, 2001)では、115 項目のモダリティ表現<sup>5</sup>が列挙されている。それらの表現がノを前置させられるかどうかを筆者の内省を用いて表 2 にまとめた。

表 2. 「話し手の気持ちを表す表現」へのノの前置

ノ必須 (A グループ)	(名詞が前接する場合のみ) はずだ、ようだ、つもりだ、わけがない、恐れがある
ノ有無 (B グループ)	言い切り(のだ)、(の)だろう、(の)かもしれない、 (の)にちがいない、(の)に相違ない、(の)か、(の)よ、 (の)ね、(の)よね、(の)さ、(の)かな、(の)かしら、 (の)だろうか、(の)ではないか、(の)ではないだろうか、 (の)って

<sup>3</sup> 「(ノ)カモシレナイ。」で言い終わっているものに加え、(ノ)カモシレナイの後部に「と思う。」や「だろう。」等が付されるもの、文中の「かもしれませんが、」等の表現を含む。

<sup>4</sup> 「ノ＋モダリティ表現」とは、モダリティ表現にノが前置し、ノの有無による違いがあるものである。例えば「(ノ)カモシレナイ」「(ノ)ダロウ」などで、表 2 の B グループにあたるものである。

<sup>5</sup> 同書では「話し手の気持ちを表す表現」と呼称されている。『初級～』では 47 項目、『中上級～』では 68 項目(『初級』で挙げられた表現を除く)述べられている。

<p>ノ不可 (C グループ)</p>	<p>そうだ①、そうだ②、らしい、と思う、みたいだ、意向形(～(よ)う)、ことにする、～ほうがいい、ほしい、～たい、～なさい、命令形(しろ)／～な、～てください、～てくださいませんか、～てくれ、～て、～ましょう、～ましょうか、～ませんか、～(よ)う、～(よ)うか、～ないか、～なければいけない、～なければならない、～てもいい、～なくてもいい、～てはいけない、ぞ、ぜ、もの、なあ、な、わ、まい、と考えられる、と言える、にきまっている、っこない、かねない、とは限らない、とも限らない、という、ということだ、とか、べきだ、ものだ、ことだ、ざるをえない、ないわけにはいかない、といい、ばいい、たらしい、ことはない、までもない、ものではない、べきではない、べからず、(よ)うにも～ない、気だ、なんと／なんて～、どんなに／どれほど／何＋助数詞～、とは、なんて、ものだ、ことだ、てしかたがない、てたまらない、てならない、かぎりだ、といったらない、なあ、つけ、由</p>
-------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

表2から分かるように、いわゆるモダリティ表現と言われるものでも、ノが必須のもの(A グループ)、ノの有無による違いが出るもの(B グループ)、ノが前置できないもの(C グループ)があることが見てとれる。A グループは名詞の場合のみノを挿入し、C グループでは常にノを付さないため、ルールとしては明快で複雑さはない。しかし、B グループ(ノ＋モダリティ表現)は、ノの有無によりニュアンスや機能の違いもあり、非常に複雑である。本稿では日本語母語話者の使用実態を観察し、ノ＋モダリティ表現の1つである「ノカモシレナイ」の産出に関して、1つの方略として使い分けの目安を提言したい。

## 2. 先行研究

### 2.1 カモシレナイについて

カモシレナイに関する研究動向は大別するとその本質的意味の違いにおいて「低度合い」と「可能性存在」の2つの考えがある。それについての説明は紙幅の関係上、以下に引用するに留める。本稿ではカモシレナイの本質的意味を可能性存在と捉え、議論を進めていく。

#### A) 低度合い(寺村(1984)、蔣(2011)など)

ダロウと同じく、自分の主観による単純な推量を表す。ダロウとの違いは、その推量の妥当性についての確信の度合いが低いことであろう。(寺村 1984:235)

#### B) 可能性存在(三宅(1992)、杉村(2004)など)

「可能性判断」：命題が真である可能性があると認識する。

(前略)注意すべきは、この可能性判断は可能性が高いとか低いとかという、可能性の程度(確からしさ)についての認識ではないという点である。(三宅 1992:38)

## 2.2 ノカモシレナイについてとその問題点

ここではノカモシレナイに関する先行研究について、そして特に学習者の産出に関連するであろう箇所を概観する。

庵ほか(2000:125)では「ある事実や状況からその背景にある事情や原因を想像して述べるような場合」にノを前接させると述べられている。(1)では「電話に出ない」ことは「デートをしている」という原因(事情)がある、という想像(話し手の関連づけ)を示しており、その関連づけの妥当性の違いにより、ノダ(確信)、ノカモシレナイ(可能性)が使い分けられていると述べられている。

庵ほか(2000)の「関連づけ」とは、「ある発話がそれを取り巻く状況と関連があることを示す」(p.270)ことである。これはムードのノダの説明としては、その多種多様な用法を統一的に述べるのには妥当であるが、ノカモとカモの違いを説明するにはやや不足があるのではないと思われる。(2)に示すように、カモを用いる場合でも「それを取り巻く状況」があり、それに「関連づけ」したことを述べていることは想定され得る。

- (1) 日曜で会社は休みのはずだが、吉田くんは電話に出ない。洋子さんとデートをしているのかももしれない。(庵ほか 2000:274)<sup>6</sup>
- (2) [曇り空を見て] 明日は雨が {降る カモシレナイ / 降る ノカモシレナイ}。

蔣(2011:136)ではカモシレナイを含む「認識のモダリティ」について、「想像や思考のような、既得の情報に基づいて、既得の情報と異なる新しい情報を導き出す創造的な心的過程である」という特徴があると述べられている。これを踏まえれば、カモシレナイという表現も「それを取り巻く状況」(既得の情報)に基づき、関連した新しい情報を発話していると言えるだろう。

そのため、庵ほか(2000)の「ある発話がそれを取り巻く状況と関連があることを示す」という説明だけでは、カモとノカモの違いが分かりづらいように思われる。ノダの説明に立脚した「ノダ+モダリティ表現」<sup>7</sup>という観点に加え、別の観点からの提言も必要ではないだろうか。

当然ではあるが、庵ほか(2000)の説明は妥当性があり、「ノ+モダリティ表現」を理解するのには適当である。しかしながら、学習者の産出に資するかと言われればなお検討する余地があるだろう。本稿では日本語母語話者の使用実態を観察し、「ノカモシレナイ」の産出に関して、1つの方略として使い分けの目安を先行研究とは別の観点から提言したい。

<sup>6</sup> 用例後部の括弧内には出典を示す。下線は筆者による。出典がないものは作例である。

<sup>7</sup> 庵(2013:6)でも、ノカモシレナイを「この用法の意味は、「のだ+モダリティ形式の意味」と分析することができる」と述べられている。

### 3. 考察

ここでは考察に入る前に、考察の前提となる観点を述べておきたい。三原(1995)では、カモシレナイやニチガイナイなどの表現は「判断形成過程が完了した上で様々な判断確定性を示す」(p.292)と述べられており、カモシレナイの「判断確定性」<sup>8</sup>は「確定に近似」(p.296)とされている。三原(1995)のこの考えは、概言のムード表現が連体修飾に生起するか否かに関しての考えであるが、2節で述べたように本稿でもカモシレナイを蓋然性の「低度合い」ではなく「可能性存在」の判断を表す表現と捉えているため、この考えを援用する。三原(1995)はカモシレナイについて以下のように述べている。本稿ではこのようなカモシレナイ観を援用し、考察を進める。

カモシレナイは限りなく確定的である。なぜならば、例えば「太郎が来るかもしれない」におけるカモシレナイは、「太郎が来る」という可能性の存在を確言的に述べているからであり、従ってそれは「太郎が来る可能性がある」と判断的に同義である。(三原 1995:294)

#### 3.1 考察の枠組み

結論から先に述べるが、本稿では「ノ+モダリティ表現」におけるノ有り表現は「話し手による事態に対する把握の弱め」<sup>9</sup>と考えている。産出時には、把握を弱める必要がある場合、ノカモシレナイを用いるということを提言したい。

カモシレナイ(無標)は、話し手が発話で述べられた事態について成立する(またはしない)という可能性があることを述べるだけである。三原(1995:294)でも「カモシレナイは限りなく確定的である」と述べられているように、可能性があるということに関してはカモシレナイの判断は限りなく確定的である。(3)では、話し手が自身の感覚の可能性が存在(成立)すること示しており、事態が実際に成立するかどうかに関わらず、判断の可能性が存在するのは限りなく確定的である。(3)をノカモシレナイとすると不自然となる。ノカモを自然とするには、(4)のように別の文脈(この場合は他者の感情・感覚)とすれば許容できると思われる。

- (3) 「青汁を試飲して」あ、意外と美味しい {カモシレナイ／?ノカモシレナイ}。<sup>10</sup>

<sup>8</sup> 「判断確定性とは、話者による判断が完全確定であるか・完全未確定であるかを両端として、その間にスペクトル的に推移する判断の度合いである。判断確定性は必ずしも事態の(非)成立に関する蓋然性の度合いと一致するとは限らない。」(三原 1995:290)

<sup>9</sup> 劉志偉氏の直話による「話し手による事態に対する把握の強弱」という観点を参考にした。

<sup>10</sup> ワンプラディット(2008:189)の用例を一部改変。(3)のような話し手自身の感覚にカモシレナイを用いる文が不自然であるとする考えは、話者の世代により容認度の違いが見られると指摘されている(國澤 2013)。本稿ではこのような用法を自然であると判断し議論を進める。

- (4) [他者が美味しそうに飲んでいるのを見て] あ、意外と美味しい {?カモシレナイ/ノカモシレナイ}。

(3)(4)から他者の感情・感覚は、話し手が「限りなく確定的」に可能性の存在を述べられるものではないため、判断(押し量り)を弱める必要が出てくると思われる。(4)を話し手の感情・感覚として理解するためには、(5)のようなやや特殊な文脈が必要となるだろう。やや特殊な場面ではあるが、(5)のように話し手自身の感覚だと判断を確定的に述べられない場合において、判断を弱めたノ有りをを用いることができるだろう。これらのように、話し手が「限りなく確定的」に可能性の存在を述べられない場合において、ノ有り表現は自然に用いることができる。

- (5) [風邪で味覚がない。でも何らかの味がする。周りの人たちは美味しいと言っている。] あ、実はこれ、美味しい {?カモシレナイ/ノカモシレナイ}。

加えて、話し手が「限りなく確定的」に可能性の判断を述べること avoided 方が良い場合もあるだろう。(6)のカモの場合、教師は学生の合格が難しいという「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切っている。つまり、合格が難しいという可能性があることを直接提示していることになる。ノカモでは、可能性の判断を弱めて示すことにより婉曲性を表現している。このように意図的に「限りなく確定的」な可能性の存在を弱め、言い切らない場合もあるだろう。

- (6) 学生：先生、私、A 大学に合格できますか？  
教師：うーん、難しい かもしれません/のかもしれません。

### 3.2 実例の考察

以下では、JCK 作文コーパスの実例を見ていく。はじめに日本語母語話者の使用実態を、最後に非母語話者の不自然な使用例を取り上げる。

JCK 作文コーパスにおいて、よく見られるカモシレナイの使い方は、読み手に対する〈勧め〉の文脈である。(7)～(9)の実例は読み手に対して、書き手の地元を紹介する文脈で、「～すると良いカモ(面白いカモ)」などと勧めている。

- (7) ほかに街中に碇のオブジェがあったりするなど、洗練された街並みの中にも昔の面影をしのばせている。このことを知って豊洲に来ると、より一層この街を深く見られる かもしれない。(j07-1)<sup>11</sup>  
(8) 鎌倉の砂浜から海を見渡すのも心が落ち着いていいものだ。箱根にいった温泉に入るのもいい かもしれない。(j14-1)  
(9) 土産物コーナーでは焼酎そのもののほかに焼酎サーバーも売っていたり

---

<sup>11</sup> 実例後部の括弧内は JCK 作文コーパスの用例情報を示している。(j07-1)のはじめの英字は母語(j:日本語、c:中国語、k:韓国語)を、その次の数字は作文作者の ID 番号、最後の数字は作文タイプ(1:説明文、2:意見文、3:歴史文)を表している。説明文は「自分の故郷について」、意見文は「晩婚化の原因とその展望について」、歴史文は「自分の趣味(昔から続けていること)について」のテーマが設定されている。



します。こういったものを家に置いてみるのも、案外面白いかもしれない。  
(j20-1)

このような文脈では、ノカモを用いて話し手の把握を弱める必要はない。なぜなら他者に勧める場合、把握を弱めてしまうと話し手の勧める熱意が弱そうに見えてしまうからである。(8)’のように非文法的ではないが、書き手が本当にお勧めしたいと言うより、「一般的には温泉に入るのも良いという意見もある」のように読み取れ、距離を感じてしまう。

(8)’ 箱根にいった温泉に入るのもいいのかもしれない。

次に見られるのが、書き手自身への言及である。(10)では書き手が馬術部に入った理由に対して、(11)では旅人に馬鹿にされる人物としての書き手、(12)では難しい料理を作れた時の書き手の感情についてである。これらは書き手が「限りなく確定的」な可能性の判断を言い切っても良い場面である。

- (10) 様々な人に、「あなたはなぜ馬術部に入ったのか？」と聞かれる。正直なところを言うと私にもはっきりとした理由はわからない。勢いで、というのが一番的確かもしれない。(j07-3)
- (11) 私が思う旅、それは決して遠い場所に行かなくてもよいものだ。いつもは行かない場所、行ったことのない場所に行ってみる。それだけで私にとっては十二分に刺激的な旅なのである。世界一周でもしている旅人には馬鹿にされるかもしれない。(j11-3)
- (12) ロシア料理などの外国の料理に手を出してみたり、時間のかかりそうな料理に挑戦してみたりと、いろいろ取り組んでみました。こういった料理が自分で作れた時の高揚感は格別です。この気分ほどいいものはないかもしれません。(j20-3)

次にノカモシレナイについての実例を見ていく。(13)～(15)は他者の行動などの原因・理由を推測したものである。(13)では晩婚化の理由、(14)では女性が晩婚化し結婚に慎重になった理由、(15)では父が温泉によく行った理由である。これらのように他者の行動理由・原因などは、書き手が「限りなく確定的」な可能性の判断を言い切れない場面である。

- (13) 晩婚化という現象が起こるということは、どこかにその原因があるはずである。原因があるから結果がある。その原因が何であるのか、私なりに推測してみようと思う。(中略)あるいはこの人となら一緒に暮らしていきたいというような、魅力的な人にそもそも出会えていないだけなのかもしれない。(j20-2)
- (14) また、女性は結婚に関して慎重になった。これは経済状況の悪化が関係していることなのかもしれないが、お金がなければ生きていきにくい世の中で、すでに経済力のある人と結婚したいと思う女性が増えたのかもしれない。(j06-2)
- (15) 私の父などは無類の温泉好きで、休みの日には毎週のように家族を連れ

て温泉へ繰り出し、日帰りでお湯を楽しんだ。(中略)子供の私は温泉の効能など知らず興味もなしだったが、冷え症に悩む母や腰痛に苦しめられる父からしたら馬鹿にできないものだったのかもしれない。(j02-1)

書き手自身のことについては「限りなく確定的」な可能性の判断を言い切れるため、カモシレナイが用いられやすいことを上述したが、(16)は自身のことであるにも関わらずカモシレナイを用いている。この作文のテーマは、昔から続けている趣味についてで、(16)の作者は音楽について述べている。

- (16) 冒頭のように音楽がないとそぞろな気持ちになってしまうのも、この影響によるところが大きいのだろう。このように私はある意味 musicaholic(音楽中毒者)であるのかもしれない。(j18-3)

ここでは(16)の作者は意図的に「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切らないようにしていると思われる。「musicaholic(音楽中毒者)」という言葉が音楽業界でどのように扱われているかは分からないが、恐らく良い意味でのオタクやマニア(その分野に深い知識を持っている人)と同じように使われていると推察される。何か趣味を持っている人は分かると思うが、趣味の世界というのは非常に奥深く、知れば知るほど自身の未熟さに気づき、自身をその世界のマニアと言うのは烏滸がましく感じる。その世界を何も知らない他者から「〇〇マニアだね」と言われると、「いや、自分なんか全然」と思うこともよくあるだろう。つまり、(16)では自身を「musicaholic(音楽中毒者)」と称することを、自慢げに聞こえてしまう、自身はまだそのレベルではない、などの理由により意図的に「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切らないようにしていると思われる。

次に非母語話者の不自然な使用と思われるものを見ていく。(17)では趣味のカラオケについて述べているもので、筆者の内省ではノを脱落させた、「まだまだカラオケに行くかもしれません。」が自然な表現だと考える。(18)ではノを付した「アニメの中の主人公たちはいつも自由にお祭りを準備するのですが、私たちは学校で夕方 10 時までいたりまた塾へ通ったりするから主人公たちが代わりに自由を満喫していたのかもしれません。」<sup>12</sup>が自然な表現だろう。

- (17) カラオケに行く習慣という趣味は私の高校を過ぎ、大学生になった今でも飽きず、ずっと続けています。この趣味のおかげで私は歌の腕は上がり、中学 2 年ごろ修学旅行で開かれた歌コンテストで優勝をしたり、中学 3 年のとき学園祭で歌を歌ったりすることもできるようになりました。理由が確かではありませんが、人の前で歌うことだけは緊張しても、歌いきれた後の気分が非常によかったのでまだまだカラオケに行くのかもしれません。(k04-3)
- (18) 私が青少年だった時期は今のよう青少年向けの映画とドラマがなかったもので、私を含めて韓国の青少年たちはどんどん日本アニメに夢中になりました。おそらく自分と同じく制服を着ている主人公たちと共感をし

---

<sup>12</sup> 誤用と思われる箇所(二重下線部)を筆者が修正した。



たでしょう。またなおアニメの中の主人公たちはいつも自由にお祭りを準備するのですが、私たちは学校で夕方 10 時までいたりまた塾へ通ったりするから主人公たちの代わりに自由を満喫したかもしれません。(k02-3)

(17)では書き手自身の将来の想像のため「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切っても良い場面であり、(18)ではアニメの主人公についての言及のため可能性の存在を言い切れない場面である。そのため(17)ではノ無し、(18)ではノ有りが自然となると考えられる。

表 3 は、1 節の表 1 でも示した母語別の(ノ)カモシレナイ使用数を調査したものである。表中の「文末／文中」は文末形式、文中形式のことであり、「(ノ)カモシレナイ。」で言い終わっているものと、(ノ)カモシレナイの後部に「と思う。」や「だろう。」等が付されているものを文末形式としてカウントしている。文中形式は「かもしれませんが」、「かもしれないし、」等をまとめている<sup>13</sup>。特徴的なのは、文末／文中形式を問わず、非母語話者のカモシレナイの使用数は母語話者を上回っているが、逆にノカモシレナイを見てみると使用数は下回っている。この原因を 1 つのコーパスだけで考察することは難しいが、この JCK 作文コーパスにおいて非母語話者はカモシレナイを積極的に用いているのにも関わらず、ノカモシレナイという表現は避けているということは言えるだろう。

表 3. カモシレナイの使用数(JCK)

	カモ [文末／文中]	ノカモ [文末／文中]	計
韓国	64 (87.7%) [42／22]	9 (12.3%) [8／1]	73 (100%)
中国	55 (96.5%) [44／11]	2 (3.5%) [1／1]	57 (100%)
日本	37 (71.2%) [27／10]	15 (28.8%) [12／3]	52 (100%)

#### 4. まとめ

「ノ＋モダリティ表現」におけるノ有り表現は「話し手による事態に対する

<sup>13</sup> (19)のような読点の誤用と思われる文もいくつかあり、そのような文は「カモシレナイ、」であっても文末形式として分類している。

(19) こうした面で日本社会が本当の意味で進歩するには、まだ時間がかかるかもしれない、晩婚化の要因として、二つ目に収入の不安定化がある。(j02-2)

把握の弱め」と捉えることにより、産出時の1つの使い分けを提言した。以下に簡単にまとめる。(ア)ではカモシレナイ、(イ)(ウ)ではノカモシレナイを用いることにより自然な使い方となると考える。

(ア)「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切れる場面

【読み手への〈勧め〉】

(8) 鎌倉の砂浜から海を見渡すのも心が落ち着いていいものだ。箱根に  
いって温泉に入るのもいいかもしれない。(j14-1)

【書き手自身について】

(11) 世界一周でもしている旅人には馬鹿にされるかもしれない。(j11-3)

(イ)「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切れない場面

【他者の行動等の理由・原因】

(13) あるいはこの人となら一緒に暮らしていきたいというような、魅力  
的な人にそもそも出会えていないだけなのかもしれない。(j20-2)

(ウ)「限りなく確定的」な可能性の存在を言い切らない場面

【意図的に評価等を下げる】

(16) このように私はある意味 musicaholic(音楽中毒者)であるのかもしれない。(j18-3)

今後の課題として、カモシレナイ以外のモダリティ表現(表2のBグループ)を扱う必要があるだろう。しかし「ノ+モダリティ表現」と言っても様々なものがあり、認識のモダリティと共起する場合(ノダロウ、ノカモシレナイ等)と、いわゆる終助詞と共起する場合(ノネ、ノヨ等)とでは様相が異なることが予想される。そのため今後、研究対象としてそれらを含めるかどうかを検討したい。

## 参考文献

- 庵功雄(2013)「「のだ」の教え方に関する一試案」『言語文化』(50), pp.3-15, 一橋大学語学研究室
- 庵功雄ほか(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄ほか(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 國澤里美(2013)「語用論の観点から見た認識のモダリティ形式「カモシレナイ」について」『言葉と文化』(14), pp.1-17, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 蔣家義(2011)「モダリティの体系と認識のモダリティ」平成22年度博士学位論文, 杏林大学大学院
- 杉村泰(2004)「事態の蓋然性と判断の蓋然性再考」『ことばの科学』(17), pp.117-138, 名古屋大学言語文化研究会
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版

- 三原健一(1995)「概言のムード表現と連体修飾節」 仁田義雄(編)『複文の研究(下)』 pp.285-307, くろしお出版
- 三宅知宏(1992)「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢日本学篇』(26), pp.35-47, 大阪大学大学院文学研究科
- ワンプラディット, アパサラキク(2008)「可能性を無くした「かもしれない」」『京都大学言語学研究』(27), pp.189-201, 京都大学大学院文学研究科言語学研究室

### 使用データ

『JCK 作文コーパス』2020 年 9 月データ収集(最終閲覧日)

〈<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>〉

# **A Study of “*Nokamosirenai*”**

## **From the Actual Usage of the JCK Essay Corpus**

**MATSUMOTO Masafumi**

The “*no* + modality expression” is very complex, with nuances and functions differing depending on the presence or absence of “*no*”. In this paper, we observed the actual usage of “*no* + modality expressions” by native speakers of Japanese in the JCK essay corpus and proposed a guideline for their usage as a strategy for producing “*nokamosirenai*”, one of the “*no* + modality expressions”.

In this paper, we propose a usage of “*no*” in “*no* + modality expressions” as a “weakening of the speaker's grasp of the situation”. In the case of (a), “*kamosirenai*” should be used, and in the cases of (b) and (c), “*nokamosirenai*” should be used to make the usage more natural.

- (a) Situations in which the existence of “infinitely definite” possibilities can be said to exist.
- (b) Situations in which it is impossible to say that there is an “infinitely definite” possibility
- (c) Situations in which the existence of “infinitely definite” possibility cannot be stated.

**Keywords:** *nokamosirenai*, *kamosirenai*, JCK essay corpus